比較文化 II ［第11回］

丸山純（jun@site-shara.net）

●1945…第二次世界大戦終結　→冷戦の開始

▼アメリカとソ連を軸に、東西を二分した陣営の対立

ヤルタ会談（1945）で分割協定

第一世界……西側資本主義体制諸国（アメリカ・西欧）

第二世界……東側社会主義体制諸国（ソ連・東欧）

第三世界……二次大戦後に独立を達成した諸国（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ）

キューバ危機（1962）、ベトナム戦争（1965～）などで対立が際立つ

東西が直接対立するだけでなく、代理戦争が起きるケースも

▼北大西洋条約機構 vs ワルシャワ条約機構

NATO……アメリカ合衆国・イギリス・フランス・イタリア・ベルギー・オランダ・ルクセンブルク・ポルトガル・デンマーク・ノルウェー・アイスランド・カナダ・ギリシア・トルコ・西ドイツ・スペイン（ポーランド・チェコ・ハンガリー・ルーマニア・ブルガリア・スロヴァキア・スロヴェニア・エストニア・ラトヴィア・リトアニア）

ワルシャワ条約機構……ソ連、ポーランド、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、アルバニア

●エジプトにおける過激主義の系譜

▼四次にわたる中東戦争

第一次（1948）…全面的なイスラエルの勝利　→　エジプト革命へ　→イラク革命へ

第二次（1956）…ナセル大統領、スエズ運河国有化　英仏がイスラエルとエジプトを攻撃

第三次（1967）…シナイ半島・ヨルダン川西岸・ガザ地区などを占領するイスラエルの一方的勝利　→ナセル死去

第四次（1973）…サダト大統領による奇襲攻撃。アラブ諸国が検束して石油戦略を展開。アラブ側、初の勝利

▼突如としてイスラエルを承認したエジプト

1977年、サダト大統領、イスラエル訪問

→79年、エジプト＝イスラエル平和条約締結　→ノーベル平和賞受賞

国内では、反体制派を厳しく弾圧

サダト大統領暗殺（1981）……ムスリム同胞団系急進派「ジハード団」所属の親衛隊兵士により暗殺。後継がムバラク

▼過激主義における３人の重要人物

サイイド・クトゥブ（1906～66）……エジプト教育省の優秀な役人。1948年、教育システムの調査でアメリカへ　→西欧文明を否定して、イスラーム主義へ（ムスリム同胞団）。ナセル暗殺未遂で拘束され、激しい拷問を受ける。獄中で、イスラーム原理主義の原点とされる『道標』を執筆　→66年に処刑

アブドゥッラー・アッザーム（1941～89）…パレスチナ人の神学者。アル・カーイダの母体となるマクタブ・アル＝ヒダマト（MAK）を設立。ビン・ラーディン、ザワヒリの師

アイマン・ザワヒリ（1951～）……エジプト人医師。名門出身ながらジハード団の活動家となり、サダト暗殺の疑いで3年間拘束（拷問）。86年に出所後、パキスタンに渡りMAKに合流。ビン・ラーディンと会い、アルカイダの副官に。ビン・ラーディン亡き後はアルカイダの最高指導者となり、アフガニスタン（パキスタン）から声明を発している

●イラン革命（1979）

▼急速な近代化への反発

米資本と組んで石油利権を独占していたパーレヴィ王家

1953年、石油の国有化をはかるモサデク政権転覆を米英が支援して、亡命中の王が帰国したという経緯がある

民衆の暴動が起き、国王はアメリカに亡命

弾圧によって亡命していたホメイニ師がパリから帰国し、政権を掌握

イスラーム主義にもとづく政策を実施

イスラーム革命の「輸出」を各国（アラブ諸国も西欧も）が警戒

●ソ連のアフガン侵攻（1979）

▼突然の軍事介入に全土で反乱

1979年12月、ソ連軍がアフガニスタンに軍事介入

78年に誕生した共産主義政権が支援を要請したから、という名目

アミン政権が徹底的に腐敗し、アメリカ寄りの姿勢を見せたので介入を決意

イラン革命がアフガンに輸出され、さらにそれが自国内の自治共和国へと波及するのを怖れた

アフガン全土で、ムジャヒディン（ジハードを遂行する者）の反乱が起こる

パシュトゥーン人系（ギラニ、ヘクマティヤール、ハリスなど）

タジク人系（ラバニ、マスードなど）

ウズベク人系（ドスタム）

ハザラ人系／ヌーリスタン人系など

▼外国からも志願兵が流入

イスラーム諸国から、ジハード志願兵たちが続々と合流してゲリラ戦を繰り広げる

→アラブ・アフガン（アラブ・アフガニー）

オサマ・ビンラーディン（1957〜2011）……サウジアラビアのビン・ラーディン財閥の17番目の息子として生まれる。クトゥブとアッザームに影響を受ける。アッザームの誘いで79年にパキスタンへ渡り、対ソ戦に加わる。アッザームとMAKを創設し、人脈を活かして各国から資金を集めてムジャヒディンの支援に取り組む

サウジアラビア、アメリカ、パキスタンなどが巨額の資金を投入

アメリカ製の近代兵器（スティンガーミサイル）が戦局を転換

標高が高いため、ヘリが自由に飛べない

モスクワ・オリンピックを西側諸国が集団ボイコット

▼ソ連軍が撤退（1989年）

当初は半年から1年ほどで撤退する目論見だった

戦局がこじれ、9年間駐留することに

兵士の間に厭戦気分がつのり、士気が低下

麻薬の蔓延／隣接共和国からのムスリム兵士

88年にゴルバチョフが決定し、89年に全面撤退

ソ連兵の死者1万5000人、アフガン側は60万人（150万人とも）が死亡

600万人の難民が発生し、パキスタンなどへ逃れた

農地、家畜の50%以上が失われ、全土に双方が埋設した地雷が残る

舗装道路も70%が破壊されるなど、インフラが壊滅

ソ連経済が疲弊し、ソ連崩壊の引き金となる

●ソ連軍撤退後の内戦とタリバンの伸張

▼政府軍とムジャヒディンとのあいだで内戦状態に

1993年、ラバニが大統領に就任

各地のムジャヒディンの武装組織が、そのまま「軍閥」になり、互いに対立

1994年、全土に内戦が広がるなか、タリバンが伸張

タリバンとはタリーブ（神学校で学ぶ神学生）の複数形

パキスタンの軍統合情報局（ISI）が難民キャンプ出身者を育成

男だけの環境で、家庭（母・姉妹）を知らずに育つ

最高指導者は、謎の隻眼の宗教者ムハンマド・オマル師

2013年4月に死亡したのに伏せられていたことが今年7月に判明

1996年、タリバンがカーブルを陥落させ、全土を実効支配

スーダンを逃れたビン・ラーディンらを客人扱いに

旧ムジャヒディン勢力は北部同盟を結成

▼タリバンが全土をほぼ掌握

1998年、タリバンが全土をほぼ掌握

北部のマザリシャリフでタリバンが5000人のハザラ人、ウズベク人市民を虐殺

女子校の閉鎖、娯楽の禁止、残虐な公開処刑など、極端な原理主義的政策を次々と実施

1992年、ナジブラー政権崩壊

1999年、ビン・ラーディンの引き渡しを拒み、国連が経済制裁を実施

2001年、偶像崇拝禁止に反するとして、タリバンがバーミヤンの大仏を爆破

●イラン・イラク戦争（1980～88）

▼イランを警戒して、サッダーム・フセイン政権を米国が支援

国境を流れるシャトル・アラブ川をめぐる領土争い

革命直後の不安定な時期にあるイランを狙う

当初はイラクが優勢だったが、しだいにイランが優勢になって膠着状態に

イスラーム革命の輸出を警戒

アメリカが莫大な軍事援助を実施

1968 年のクーデターでバアス党が政権を握り、79 年からフセインが大統領に

バアス党：アラブ社会主義復興党……私有財産は認める（イラク／シリア）

フセイン政権は、国内のシーア派や北部のクルド人勢力を化学兵器を使うなどして弾圧

●湾岸戦争（1990～91）

▼ 1990 年 8 月、イラクがクウェートに侵攻して占領

国連による撤兵決議に応じなかったため、米国を中心とする多国籍軍が 1991 年 1 月攻撃を開始（砂漠の嵐作戦）

ステルス戦闘機など最新の兵器を投入し、劣化ウラン弾も使われた

2 月末までにクウェート全土を解放

クウェートに隣接するサウジアラビアを防衛支援する名目で、米軍がサウジに駐留

湾岸戦争終了後も駐留を続ける　→聖地に異教徒が滞在することに反発

●アル・カーイダの伸張

▼ 88 年、ビン・ラーディンがアフガニスタンでアル・カーイダを設立

カーイダは「基地」の意。当初はソ連と戦うジハード戦士の家族たちの保護施設だった

▼帰国後、反米・反サウジ王家闘争を開始

ソ連撤退後、90 年、サウジに英雄として帰国

湾岸戦争を機に、米軍がサウジアラビアに駐留することになったのに反対して、反米／反サウジ王家闘争を開始

92 年にサウジを出国してスーダンに渡る

▼アメリカを狙った国際テロ事件

1993 年、世界貿易センター爆破事件（6 名死亡）

1998 年、ケニア（291 名死亡）とタンザニア（10 名死亡）でアメリカ大使館爆破事件

米クリントン政権は、報復としてスーダンの薬品製造工場とアフガニスタンの訓練キャンプをトマホークミサイルで爆撃

2000 年、イエメンのアデン港で、米軍のミサイル駆逐艦「コール」が小型ボートの自爆攻撃を受け、17 名が死亡

▼残党はユーゴスラビア内戦へ

ソ連撤退後、アフガンに集まったジハード戦士たちは旧ユーゴスラビア内戦に転じる

1990 年、ムスリムのアルバニア人がコソボ共和国として独立宣言

→スラブ系のセルビア人との対立

1992 年、ムスリムのボシュニャク人が、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナとして独立宣言

→内戦が本格化

● 9.11 同時多発テロとアフガン戦争

▼アメリカ本土を狙った同時多発テロ

2001 年 9 月 11 日、ニューヨークの貿易センタービル（2 機）とワシントンの国防総省に、ハイジャックされた旅客機が激突

死者は、4 機の飛行機の搭乗者 246 名、国防総省で 125 名、貿易センタービルで 2602 名

実行犯 19 名のうち 15 名はサウジアラビア国籍

リーダーであるモハメッド・アタはドイツの大学を出たエジプト人エンジニア

計画を練ったのは、パキスタン出身のハリッド・シェイク・ムハンマド

ビン・ラーディンの片腕として、これまでも多くのテロを企画

▼有志連合軍が空爆を開始

ブッシュ大統領は、対テロ戦争を十字軍になぞらえて報復を宣言　→第十次十字軍

アメリカ各地で、反イスラーム感情が蔓延し、ムスリムへのヘイトクライムが頻出

首謀者はビン・ラーディンとアル・カーイダだ、として引き渡しを要求

タリバン政権は拒否（パシュトゥヌワレイの客人保護）

アメリカ議会、EU外相会議も全会一致で攻撃を支持

米英を中心とした有志連合軍が10月7日より空爆を開始（不朽の自由作戦）

▼タリバン政権の消滅とその後の経緯

11月13日には北部同盟軍がカーブルを制圧、タリバン政権は消滅（逃走）

ビン・ラーディンやザワヒリらアル・カーイダの要人は、トラボラの洞窟経由でパキスタンの部族地域に脱出

11月、ボン合意が成立し、12月にはカルザイを議長とする暫定政府が成立

2002年6月にアフガニスタン・イスラーム移行政府が成立

2004年10月の大統領選挙で、カルザイが当選。アフガニスタン・イスラム共和国が正式に成立

2005年後半から、タリバンが復活して、治安が急速に悪化

2014年末、NATO主体のISAF（国際治安支援部隊）が任務を終える

オバマ政権は、2016年末までに駐留米軍を撤退するとしていたが、2015年10月に延長を発表

タリバン側は、外国軍の完全撤退が実現しないうちは、アフガン政府との交渉を拒否

▼アル・カーイダの変容

対テロ戦争で国際的な情報管理が行き届くようになり、資金の動きはもちろん、すべての通信などが厳しく見張られる時代に

アル・カーイダのネットワーク（とくにインターネット経由の情報伝達）が機能しなくなり、国際的な組織でテロ（ジハード）を実施することが困難に

原始的なコミュニケーション手段しか安全でなくなり、アル・カーイダ司令部もときおり声明を出すのみに

2011年5月、パキスタンのアボタバードの住居を米海軍特殊部隊が急襲

潜伏していたオサマ・ビン・ラーディンを殺害

最高指導者はザワヒリに受け継がれる

▼9.11後の新しいグローバル・ジハード

スーリーによる個別ジハードの提唱

ビン・ラーディンの片腕だったアブー・ムスアブ・アッ・スーリー

論文『グローバル・イスラーム抵抗への呼びかけ』2004年

分散化し、組織を最小化し、組織間のつながりを極力減らしていくことで、摘発を逃れることができる

それぞれ個別の場所で、小規模の、しかし象徴的に人目を惹くテロを実行していく

ローンウルフ（一匹狼）型テロ、ホームグロウン型テロ

アル・カーイダのフランチャイズ化（自立分散化）

やがて紛争地域に「開かれた戦線」という聖域を見出して大規模な武装化・領域支配の権力を掌握する

スーリーの計画を先取りするように、イラク戦争でできた「開かれた戦線」に「イラクのアル・カーイダ」が登場し、やがて「イスラーム国（IS）」となっていく

●イラク戦争

▼大量破壊兵器疑惑

2002年初頭に、米ブッシュ政権がイラン、イラク、北朝鮮を「悪の枢軸」と非難

イラクは、湾岸戦争後の経済制裁を受けながら、国連の核査察を拒否

国内の反対勢力を激しく弾圧

アル・カーイダの背後にイラクがいるのではないかと疑う

核査察拒否は国連決議違反に当たる

→イラクは仕方なく査察を受け入れたが、2003年1月の中間報告では「大量破壊兵器」の確証は得られず

2003年3月、各国の反対（国連安保理の明確な決議のないまま）にもかかわらず、空爆を開始

クウェートから米英が侵攻（イラクの自由作戦）

4月にバグダッド陥落、フセインは逃亡。5月1日に勝利宣言

▼復興と対立

連合国暫定当局（CPA）の統治下に入って復興へ

04年6月にイラク暫定政権に主権が移譲

2005年1月国民議会選挙で、シーア派勢力が議席の過半数を占める。クルド人のタラバニが大統領に（移行政府）。10月に国民投票で憲法承認

2005年末に議会選挙、06年4月にシーア派のマリキを首相とする政権が議会に承認

テロや武力抗争が続く

イラク政府、イラク軍、秘密警察などは地下に潜行

フセイン政権に関係した者（バアス党関係者、軍関係者など）は排除

社会が機能しなくなる

宗派対立（スンナ派vsシーア派）、民族対立（クルド人問題）、イスラーム過激派によるテロが相次ぐ

多数派のシーア派が優遇され、少数派のスンナ派はフセイン時代に恩恵を蒙ったとして冷遇

シーア派内部でも、政府側と強硬派のムクタダー・サドル一派（マフディー軍）が対立・抗争

クルド支配地域内で、アラブ系やトルクメン人、アッシリア人らの少数派への民族浄化が起こる

ヨルダン出身のザルカウィが率いる「イラクのアル・カーイダ」が、スンナ派地域で反米武装闘争を繰り広げる　→のちのイスラーム国

ザルカウィは2006年、米軍の空爆で死亡

暫定当局や外国人へのテロも相次ぐ

民間軍事会社に戦争を委託

米政権に深く関係しているハリバートン社やブラックウォーター社

軍・産複合体と政・官が癒着

後方支援だけでなく、要人警護や最前線の戦闘までを担当

民間派遣要員は罪に問われなかったため、市民の無差別殺戮なども頻発

アメリカへの憎悪をかき立てた

結局「大量破壊兵器」は発見されず

湾岸戦争後の国連査察ですべて破棄されたことが明らかに

のちに米政府も、CIAの情報が誤りであったことを認める

フセイン政権とアル・カーイダの関係を示す証拠も発見できず

英国ブレア元首相も2015年10月、間違った情報で判断したと、謝罪

イラク戦争がIS伸張につながった

日本も2003年から2008年まで、自衛隊（のべ約1万9700名）を派遣

総経費887億円

フセイン大統領は2003年12月にイラク中部の隠れ家の穴に隠れているところを逮捕

大量虐殺の罪で訴追、有罪となり、2006年末に処刑

アメリカが国際法を超えて非人道的な捕虜虐待を続ける

キューバのグアンタナモ基地、イラクのアブグレイブ刑務所、世界各地の秘密収容所

●アラブの春

▼チュニジア

2010年12月、チュニジアの26歳の青年がガソリンをかぶって焼身自殺。翌年1月死去

2011年1月に首都チュニスで暴動が発生

23年政権の中心にいたベン・アリ大統領は辞任に追い込まれる　→ジャスミン革命

穏健イスラーム政党アンナハダが41%の議席を占めるが、失業率が増加し、民衆が離反

世俗派政党との共闘を余儀なくされる

「多元的な民主主義の構築に寄与した」という理由で「国民対話カルテット」が2015年のノーベル平和賞を受賞

▼エジプト

2011年1月、20万人の市民がタハリール広場を占拠。軍も同調

29年間独裁政権を維持してきたムバラク大統領が辞任

同胞団（自由公正党）が43%の議席をとり、ムルシーが大統領につく

イスラーム色の強い政策を打ち出し、民衆が離反　→再びデモが相次ぐ

クーデターでムルシら同胞団系を拘束。軍のトップシーシが大統領に

▼リビア

2011年2月よりデモが頻発

41 年間リビアに君臨してきたカダフィ大佐の中央政府と国民評議会が内戦に

NATO 軍を中心とした欧米諸国とアラブ諸国が介入

8 月になって首都トリポリが陥落し、カダフィは逃亡、2ヵ月後に射殺

世俗派勢力とイスラーム勢力が東西に別の政府を立ち上げ、分裂

→統一政府づくりで合意（2015.12.7 記事）

傭兵などによってカダフィ政権の近代兵器がアフリカ各地に拡散

テロの温床となり、IS 指導部の移住もささやかれている

▼イエメン

2011 年 2 月よりデモが頻発し、33 年間政権にあったサレハ大統領が権限移譲に同意

女性活動家のカルマンは 2011 年のノーベル平和賞に

▼シリア

2011 年 3 月から大規模な民主化要求運動が発生

父の代から 40 年続くアサド政権が強権的に弾圧

国民の 8 割はスンナ派だが、大統領一族はシーア派のなかのアラウィ派

2013 年夏、アサド政権が化学兵器を自国民に使っているという理由で、国連軍の介入が検討される

ロシアと中国が拒否権を行使して、実現せず

地上軍派遣に躊躇していたオバマ大統領は、シリア政府（アサド政権）と共同で化学兵器破棄にあたるとするロシア案に飛びつく

化学兵器禁止条約に基づき設立された国際機関「化学兵器禁止機関」がノーベル平和賞に

IS 掃討を目的に、2014 年 8 月のイラクに続いて、9 月よりシリアでも米軍の空爆が開始

バーレーン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、ヨルダンのアラブ諸国が同調

▼これまでにない特徴

衛星放送（アル・ジャジーラ）や携帯電話、ブログ、Facebook、Twitter などの SNS が革命の情報伝達に大きな役割を果たした

アラブ圏だけでなく、さまざまな国々に波及。バーレーン、ヨルダン、モロッコでは憲法改正が実現

医者 井戸を掘る

――アフガン旱魃との闘い

中村哲著／石風社

パキスタンとアフガニスタンで十八年間ハンセン病根絶と無医地区診療に心血を注いできた医師、というよりも、この十月の国会に参考人として呼ばれて「自衛隊派遣は有害無益」と主張したあの小柄な髭の人、と紹介したほうがいいかもしれない。本書は中村哲医師による、アフガン大旱魃との闘いの記録である。

二〇〇〇年六月、アフガン東部の山間にある診療所を訪ねた中村は、赤痢の大流行の原因が、川や井戸水の枯渇であることを知る。中央アジア全域で空前の大旱魃が発生し、アフガンだけで千二百万人が被災、百万人が飢餓に直面していた。

戦乱で荒廃した国土がこれ以上砂漠化すれば、多くの難民が他国へと流出し、国が滅びる。事態の深刻さに戦慄を覚えた中村は、まったく未知の井戸掘りへと、徒手空拳で乗り出していく。それから一年。北部同盟兵士の来襲、急速に低下する水位、巨礫にはばまれる掘削、売名行為にふける欧米援助団体との確執など、多くの困難をくぐり抜け、五百本以上の井戸を掘り当てて、結果的に二十万人以上の難民化を防ぐことに成功した。

サムライ精神にあふれた中村とさわやかな助っ人たちが土地の人たちと心の交流を繰り広げる、感動のドラマ。本書をそんなふうに読むこともできるだろう。機械力が通用せず、昔から地元で使われている道具や技術の改良で大きな成果をあげていくあたりも、痛快だ。しかし読了後、強烈に印象に残るのは、テロリスト隠蔽と女性の人権侵害で国連制裁を決議してタリバン政権を追い込み、餓死寸前の庶民を見殺しにできる「西欧の論理」への、中村の激しい憤りと失望である。

タリバンはなにをしてきたのか。なぜ大仏は破壊されたのか。ブルカを脱いでテレビに映る女性はだれなのか。そして日本になにができるのか。硬質の見事な文体が、真実を告げる。（評・丸山　純）

（月刊『望星』２００2年2月号）

正体

――オサマ・ビンラディンの半生と聖戦

保坂修司著／朝日新聞社

九月十一日、私はパキスタンにいた。凄惨な光景をテレビで見た直後は胸がつぶれる思いでみんな過ごしていたのに、しだいに反米感情が盛りあがった。声高に「十字軍」を叫ぶブッシュ。静かに語りかけるオサマ（と彼らは呼ぶ）。勝負は明らかだった。言葉はわからないのに、ひたひたと胸に迫る「なにか」を感じた。

本書は、多くのムスリムたちの心をつかんだ現代のカリスマ、オサマ・ビンラディンを描いた評伝である。書店にはまだまだ各種のイスラーム本が平積みになっているが、著名な研究者の著作でも軸足はこちら、つまり欧米側に置かれている例がほとんどだ。だが、オサマを狂信的なテロリストと位置づける西側の視点だけでは、問題の本質は見えてこない。

本書の特徴は、オサマ自身の声明やインタビューを手がかりに、その思想が育まれた背景や変遷をオサマの側から読み

解いていくところにある。出自をめぐるコンプレックス。若き日の対ソ聖戦中に芽生えたアメリカへの嫌悪。英雄として帰国した母国での処遇。そして神の国の実現に燃えるタリバンとの出会い。人間としてのオサマが浮かびあがってくる。

著者はクウェートやサウジの日本大使館に専門調査員として勤務した経験をもち、同い年であることからオサマに興味が湧いて「オサマ・マニア」となったそうだ。コーランの引用をはじめ、イスラームの文化資産を縦横に散りばめて語られる、オサマの言葉。異教徒には理解しがたいその文脈をここまで丹念に分析できる広範な知識にも、驚かされた。

一次資料にこだわり、伝聞や憶測は省かれているため、陰謀の解明を期待すると肩すかしをくう。しかし、オサマが背負う周縁性の指摘から彼が最後にめざした正統カリフ制の復活を提示するまでの終盤の展開は、まさに圧巻。歯切れよい文体も大きな魅力だ。(評・丸山　純)

(月刊『望星』２００２年４月号)

アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない　恥辱のあまり崩れ落ちたのだ

モフセン・マフマルバフ著
武井みゆき・渡部良子訳／現代企画室

話題の映画『カンダハール』を観た。空から降る義足、カーテン越しの診療、色とりどりのブルカの群れ……いまでも鮮やかにそれぞれのシーンがよみがえる。強烈な映像体験だった。しかし初めてマフマルバフ作品に接したせいか、現地を旅した過去が邪魔するのか、現実と虚構とが渾然一体となったその独特の世界を無条件に受け入れることができなかった。

映画制作に際して、マフマルバフは一万ページにおよぶ文献に目を通したという。本書はその成果をまとめたもので、人権抑圧と飢餓に苦しむアフガン社会の実態を広く世界に訴えようと、映画公開に先立って発表された。簡潔で力強い文体。統計数字の巧みな見せ方。秀逸なたとえ話。自身が現場で見聞きした体験の語り口もきわめて映像的で、ぐいぐいと引き込まれていく快感はたまらない。

ただし、映画以上に疑問を感じた部分もある。ブルカを女性抑圧の象徴として一方的に退けたり、伝統的な部族社会を近代化への「抗体」だと断罪するのは、欧米の視点そのまま。タリバーンをパキスタンの傀儡政権と決めつけ、アフガンがかつてイランから分離しなければ共に石油による繁栄を享受できたと語るあたりにも、イラン人ならではの感情が覗く。

二月号の本欄で紹介した中村哲医師はキリスト者だが、大仏の破壊を「人の愚かさを一身に背負って逝こうとする荘厳な意志の体現」と見なした。ムスリムのマフマルバフは「自らの偉大さなど何の足しにもならないと知って砕けた」と書く。中村に感動したあとだけに当初は違和感をおぼえたが、やがて、大仏とは単純に国際社会を指し、アフガンを見殺しにした罪によって崩壊したのだと解釈できることに気づいた。九月十一日以後の世界の姿が、見事に暗示されている。

奔放な演出が、現実を超えて本質を暴き出すのを実感した。(評・丸山　純)

(月刊『望星』２００２年５月号)

イラクとアメリカ

酒井啓子著／岩波新書

ビンラディンもオマールもいまだ行方不明のままだというのに、イラク侵攻に向けてアメリカが動き始めている。この時期になぜそこまで執拗にフセイン叩きをあせるのか、どうにも理解しがたい。

おまけにイラクという国の実情は、わからないことだらけだ。フセインはどうやって実権を握ったのか。どんな判断からイランに攻め込み、戦後の反政府運動をどのように鎮圧したのか。クウェート侵攻という虎の尾をなんで踏んだのか。空爆開始直前になぜ外国人人質を突然解放し、みじめな敗戦を甘受したのか。現在も続く国際的な経済制裁や武器査察が実効をあげていないのはどうしてか……。

こうした積年の疑問を解消してくれる本が、ついに登場した。著者はイラク政治の研究者で、日本大使館の専門調査員として現地で長く暮らした体験も持つ。一次大戦後の国家設立から筆を起こし、フセインの生い立ちやその卓越した統治術に触れながら、二つの戦争を経て九・一一後に再びアメリカとの緊張が高まるまでの経緯を浮き彫りにする。

書名から、イラクとアメリカとの愛憎劇が本書のテーマだろうと当初は想像していたのだが、読み進むうちに、フセインという希代の政治家が、東側と西側、アラブとユダヤ、スンナ派とシーア派、イランとトルコなど、中東地域に深く刻まれた大小さまざまな二極対立を巧妙に利用し、国際社会としたたかに渡り合ってきた過程が明らかになってきて、興奮させられた。「アメリカか、フセインか」と世界に迫るブッシュだけでなく、チョムスキーらの人道的発言までがこの二極対立の構図に巻き込まれ、駆け引きの道具とされてしまうのだ。

空爆か、弾圧か。イラク国民はもちろん、私たちもそんな不毛な二者択一を前にしている。二極対立の思考から脱しない限り、未来は開けない。[評・丸山　純]

(月刊『望星』２００２年12月号)

イラク戦争と情報操作

川上和久著／宝島社新書

あの同時多発テロから丸三年経った九月十三日、パウエル米国務長官がついにイラクにおける大量破壊兵器の発見を断念すると表明した。開戦前に強調された「差し迫った脅威」などどこにもなかったのを、政権として公式に認めたことになる。これだけ「嘘」が判明してもなお、ブッシュが再選に向けて互角以上に選挙を戦えるのはどうしてなのか。そんな疑問が日増しに高まってきた矢先、本書に出会った。著者はコミュニケーション論を専攻する政治心理学者。メディアのあり方や情報操作を扱った著作を持つ。

タイトルだけ見れば、今回のイラク戦争におけるブッシュ政権の情報操作を暴いた本のように思えるかもしれないが、本書がユニークなのは、ブッシュ政権の「やり口」を、歴代の米国政府が実践してきた典型的なメディア＝世論対策の延長にあると位置づけた点にある。

独立戦争時から湾岸戦争までを扱う本書の前半で描かれるのは、「政治的な武器」としてメディアを使おうとする米国

政府と、部数・視聴率獲得のために権力に迎合しながらも「真実を伝える公器」としてそれに対抗してきたメディア側との相克の歴史だ。各戦争を通じて政治的プロパガンダにメディアを用いる研究も高度に発達し、第二次世界大戦の頃には世論を情緒的に扇動する七つの法則が見い出されて、日本による真珠湾攻撃に対しても巧妙に応用されたという。

そして反戦運動の盛り上がりによって撤退を余儀なくされたベトナム戦争の反省から記者の従軍が見直され、メディアから見えないところで電撃的に作戦を遂行したパナマ侵攻や、戦場の悲惨さを見せない湾岸戦争へとつながっていく。

わずか五票差で軍事参入が決まった湾岸戦争では、病院におけるイラク兵の残虐ぶりを告発した少女の議会での証言が決定的な役割を果たしたが、じつは彼女は難民などではなく、在アメリカのクウエート大使の家族だった。大手のＰＲ会社が仕組んだヤラセだったのだ。イラクによる環境テロと喧伝された油まみれの水鳥二万羽の死も、じつは米軍の爆撃による流出事故だったことが判明する。

こうした常套手段を繰り返し見せつけられると、九・一一からイラク戦争までを扱う本書の後半に登場する数々の事例が、政権とメディアと大衆が望んでいた「作られたドラマ」に沿ったものであり、それは「米国の遺伝子」であることがすんなりわかってくる。今度の選挙でケリーが勝っても情報操作は続くだろうという著者の指摘は、心に留めておきたい。

余談だが、評者は広告業界の出身である。かつて叩き込まれた米国流コピーライティングの手法が世論の操作にも用いられている例を本書で幾つも見つけて、複雑な心境になった。（評・丸山　純）

かわかみ・かずひさ　一九五七年東京都生まれ。明治大学大学院法学部長。著書に『メディアの進化と権力』『情報操作のトリック』『北朝鮮報道』など。

（月刊『望星』２００４年11月号）

誰がダニエル・パールを殺したか？（上）（下）

ベルナール＝アンリ・レヴィ著

山本知子訳／ＮＨＫ出版

九・一一の同時多発テロから米軍のアフガン侵攻、タリバン政権崩壊と、めまぐるしく世界が動いた直後の二〇〇二年一月、米国の保守系日刊紙『ウォールストリートジャーナル』の記者であるダニエル・パールがパキスタンで誘拐され、処刑された。日本ではさほど大きな話題にならなかったが、銃口を突きつけられた脅迫ビデオや凄惨な斬首シーンの映像がインターネットを通じて広く流出し、世界中に強烈なショックを与えた。

この事件は、奇妙な謎に満ちている。ユダヤ人なのに、パールはなぜそこまで執拗にイスラームの暗部に深入りしたのか。ムシャラフ大統領が解放近しをにおわせたのに、なぜパールは処刑されてしまったのか。遺体が未発見な段階で、パールを罠にかけた主犯がいち早く自首したのはなぜなのか。一味が単一の組織ではなく、日頃は対立関係にある過激派たちの大連合だったのはどうしてか……。

これらの謎をめぐって各国のメディアに、そしてインターネットに膨大な情報や分析が出回っている。しかしどれも断片的で、事件の全容を解明し、背景を語り尽くすものはなかった。そこへ登場したのが、本書である。各国でベストセラーになったが、刊行後二年を経て、ようやく日本語で読めるようになった。

著者は小説やルポ、映像制作も手がける、フランスの哲学者。同じユダヤの血を引くジャーナリストとして、パールに関心をいだいたという。七〇年代の印パ紛争でバングラデシュの独立に関与し、九〇年代はボスニア紛争の実態を暴くドキュメンタリーフィルムを制作するなど、「行動する論客」として知られている。シラク大統領派遣の使節団でアフガンを訪れた際、カルザイ首相（当時）の御前会議の席で、パール殺害を告げられた。

そんな経歴と人脈を活かし、これまで隠されていた真実が次々と明らかにされていく。インドの諜報機関やアフガン政府内の機密文書をやすやすと入手したり、イスラエルの参謀総長の意見を直接聞いたりできるのは、まさに著者の真骨頂だ。

カラチ、ロサンゼルス、ロンドン、サラエボ、ニューデリー、イスラマバード、カンダハル、ドバイ。本書の大半はパールと、主犯のオマル・シェイクの足取りを追うのに費やされるが、将来は国会議員かもと嘱望された英国生まれのオマルがボスニア体験を経て着々とテロリストの道を歩んでいく様は、胸が詰まる。そして、終盤に浮かびあがるオマルのもう一つの顔と、パキスタンが背負い込んだ、危険で巨大な闇のネットワーク。これを知ろうとして、パールは殺されたのだ！

本書は独自の「調査報告小説」という凝った手法で書かれているため、これ以上はネタバレになる。続きはめくるめく知的な文体で、どうぞ。（評・丸山　純）

ベルナール＝アンリ・レヴィ　一九四八年アルジェリア生まれのユダヤ系フランス人。主な著書に『フランス・イデオロギー』『危険な純粋さ』など。

（月刊『望星』２００５年7月号）

ジハードとフィトナ

――イスラム精神の戦い

ジル・ケペル著／早良哲夫訳／ＮＴＴ出版

国内テロが頻発するイラクとアフガン、ハマスの躍進で先が見えないパレスチナ、イランの核開発やムハンマド風刺画騒ぎに手を焼く欧米……イスラームの周辺から吹き荒れる嵐が、相変わらず世界を揺さぶり、なぜこんな状況が到来したのか、そして解決の道はないのかと、誰もが指針を探している。ちょうどそこへ、絶好の本が出た。書名にある「フィトナ」とは、イスラーム世界の「内なる戦い」の意味。外部の不信心者と戦う「ジハード（聖戦）」とは対極にある概念で、イスラーム共同体の荒廃や分裂を招く。

本書はこの二つの概念を基軸に据えて、パレスチナ問題からアルカイダによるテロ、イラク戦争、そして欧州がかかえる移民問題まで、いま世界が直面している困難な状況を、近代化と信仰とのあいだでアイデンティティーを模索するイスラームの精神史という観点から解き明かしたものである。九・一一以降、さまざまな本を読んでも何かもうひとつわかったという気がしなかったが、本書のおかげで、原理主義的なイスラーム諸思想が世

界史の流れを大きく動かしていった構図がじつにすっきりと納得できた。

著者はフランスの政治学者で、本書のあちこちに欧州ならではの視点が活かされている。ソ連崩壊後、マルクス主義と入れ替わるように欧州にイスラーム原理主義が浸透していった過程などは、その典型だ。また、終章で取り上げられる欧州各国の移民問題への地道な取り組みぶりには、圧倒される思いがした。すでに欧州も「イスラームの土地」となり、互いに異文化との共存をめざすしか、道はない。もし欧州の対話が失敗に終われば、世界は確実にジハード主義者が暗躍するところとなり、フィトナに陥る。

自文化中心主義を捨てるべく、いま人類は世界史の分岐的に差しかかっていることを痛感させられた。（評・丸山　純）

（月刊『望星』２００６年４月号）

イスラムに負けた米国

宮田律／朝日新書

九・一一から六年が経とうとしているのに「対テロ戦争」の終わりが見えない。というより、勝負はもうついてしまった。アメリカは負けたのだ。『イスラムに負けた米国』と書名にはっきりうたった本書を読んで、改めて痛切にそう感じた。

日本ではあまり報道されないが、アメリカは各地で手詰まりの状態に陥っている。本書の冒頭に手際よくまとめられているように、軍を駐留させているイラクやアフガンはもちろん、パキスタンの部族地帯問題やイランの核疑惑、パレスチナ内紛、各国の政権腐敗や人権抑圧などの政治的な面でも解決の道が見えない。

それだけなら「負けた」とは言えないが、どの国でも反米感情が急激に盛り上がり、急進的なイスラーム主義に共感する者が増えてきたことが問題だ。テロリストを徹底的に抹殺するという力の論理が、逆に膨大なテロリスト予備軍を生み出してしまった。本書によるとイスラーム諸国では若年層の割合が高く、二十歳以下の人口が五十％前後を占める（欧米や日本では二十五％ほど）。宗教学校などで過激思想に触れ、アメリカを憎むようになった若者たち相手に、今後も終わりのない戦いを挑んでいくことになる。

では、なぜアメリカはそれほどまで憎まれるようになったのか。本書はそれを歴史的な経緯とアメリカならではの政治体制のなかに見ていく。なかでも重要なのが、歴代の政権がイスラエルを一方的に支持して巨額の援助を続け、大義なきパレスチナ占領に加担してきたことだ。ユダヤロビーが選挙の当落を握る限り、パレスチナ問題の解決は今後もありえないと思うと、暗澹たる気持ちになる。

また、冷戦時代のアメリカは、ソ連に対して効果的なら、腐敗した政権であろうとイスラーム原理主義のセクトであろうと見境なく武器や金を援助した。フセイン政権やタリバンに参加した軍閥もかつてはアメリカの盟友だった。アメリカの外交戦略が相手の民族性や文化を尊重しないご都合主義と二重基準で成り立っていたことが、どの事例からも覗く。核をめぐって妥協点の見いだせない対イラン関係の現状も、ホメイニ革命の前後や、一九五三年のＣＩＡによるモサデク政権転覆にまでさかのぼって歴史を見つめることで、なるほどと納得できた。

新書という制約で議論が尽くせない部分もあるようだが、綿密な検証を待っていたら時代はどんどん進んでしまう。断片的な情報をコンパクトに一覧できる本書の刊行は、時機を得ていると言えよう。

アメリカとイスラームとの対立は根深く、冷戦以上に長く続く可能性が高い。日米同盟でアメリカに盲従するのは、危険だ。歴史的なしがらみのない日本は、これまでイスラーム社会から高い評価と信頼を受けてきた。両者をつなぐ架け橋となれる素地がある。（評・丸山　純）

みやた・おさむ　一九五五年山梨県生まれ。イスラム政治史・国際政治学を専攻。主な著作に『中東情勢のいまを読む』『イスラム超過激派』『イラクと日本』など。

（月刊『望星』２００７年10月号）

イラクは食べる

——革命と日常の風景

酒井啓子著／岩波新書

まだ当分は戦争状態が続きそうなのに、もうイラクの食文化を紹介する本が出たのかと驚いて手に取ったが、米英のイラク侵攻前に本欄で取り上げた『イラクとアメリカ』を書いた酒井啓子が著者だったことに、さらに驚いた。ところがページを繰るうちに、本書は食文化という庶民の生活に根ざした視点から混迷する現在のイラク情勢を見つめようという、野心的な試みであることがわかってくる。

本書は四つの章から構成され、まず第一章では人口的に多数派である南部のシーア派社会が取り上げられる。卓越した影響力を持つシスターニ師がイラン出身であることは周知だが、自派の民兵を国軍や警察に採用させたイスラーム革命最高評議会もイランの支援を受けてきた亡命政党であり、イラク生え抜きのサドル派と民兵の処遇を巡って激しく対立しているという、現在の構図がじつによくわかる。そのため、シーア派のイスラーム主義政党が連立する現政権はイランと同様の「革命政権」に他ならないという指摘も、すんなりと飲み込めた。イランの宗教革命の拡散を恐れてフセイン政権にてこ入れし、後にそれを自ら倒したアメリカにとって、なんという皮肉だろう。

第二章では、少数派に転じた中部のスンナ派社会の混乱ぶりが語られる。敬虔な「モスクの街」だったファルージャが、猜疑心にかられた米軍の暴走から一気に反米運動の拠点となり、武装勢力も次々と結集して、五百回を越える空爆を受けた。もともとイラクでは宗派としてまとまることがなかったため、スンナ派を代表できる政党がない。そこへ入り込むのが外国からのテロリストと旧来の部族制の枠組みで、資源に恵まれないスンナ派地域の未来はまだまだ先が見えない。

第三章では、政局運営のキャスティングボードを握り、西欧からの支援を受けてわが世の春を謳歌するクルド人居住区の繁栄と影を落とす少数民族問題が、続く第四章では外国の軍隊の駐留をイラク人がどう迎えたかが語られる。米国追従の自衛隊派遣で、七〇～八〇年代に日本の民間企業がイラクで築きあげてきた高い信頼が、大きく損なわれたという。

こうした政治状況の分析に織り込まれるのが、イラクの郷土料理だ。戦火を逃れた難民の郷愁を誘うチグリス川の焼き

魚、シーア派の祝祭で振る舞われる子羊のオーブン焼き、神が天から降らせたというクルドの激甘のお菓子、旧オスマン帝国領に広まるファルージャの串焼肉、肉団子や米を名字にしたイラク版幕末の義士たち……。単なる狂言回しではなく、章や本文の展開に深く結び付きながら食文化が登場する。終章の「ひっくり返しご飯」や手作り焼き菓子についての語りには、イラクへの著者の想いがあふれていて、胸を打たれた。（評・丸山　純）

さかい　けいこ……東京外国語大学大学院教授。イラク政治研究専攻。主な著書に『イラク　戦争と占領』『フセイン・イラク政権の支配構造』など。

（月刊『望星』２００８年７月号）

戦争詐欺師

菅原出著／講談社

イラク戦争が始まってまだ六年にしかならないのに、当事者の回想録やジャーナリストによる内幕ものがずらりと書店に並ぶ。しかし米国の読者を想定した大部のものがほとんどなので、なかなか手が出しづらい。そこへ、日本人による切れ味鋭いノンフィクションが登場した。

　この戦争は謎だらけだ。ビンラディン率いる国際テロ組織が相手だったのに、いつの間にかすべての黒幕が独裁者フセインになったのはなぜか？　ないはずの大量破壊兵器の存在が何度も報道されたのはなぜか？　侵攻に消極的だったパウエル国務長官が一転して国連で移動式生物兵器工場という怪しげな情報を開示したのはなぜか？　占領政策がくるくると変わっていったのはなぜか？　こうした数多くの謎や疑問が、本書を読み進むにつれてみるみるうちに氷解していく。

　驚くべきことに、これらすべての背景に、ブッシュ政権内の血なまぐさい内部抗争がある。最初から戦争がしたかった副大統領室＋国防総省＋ネオコンと、地域の力の均衡を重んじる国務省＋ＣＩＡ＋軍制服組とが「個人的野心、嫉妬心や思い込み、組織同士の対抗意識など」のきわめて人間的な感情にかられて、すさまじい情報戦を繰り広げた。そこに狡猾なロビイストやペテン師が群がり、マスコミが煽り立てて、一貫性のない政策が次々と打ち出されていく結果となった。

　歴史とはこうしてつくられていくものなのかと思わず感慨にふけるとともに、こんな内部抗争の犠牲になったイラクの民衆を思って、怒りが湧いてくる。と同時に、それぞれ立場は違っても、異国のジャーナリストにも丹念に自身の立場や過ちを語る当事者たちの公正さに、アメリカ社会の健全さを見る思いがした。人類史のうえでも重要なブッシュの八年間と、オバマが今回選ばれた意味を深く考えさせてくれる本だ。（評・丸山　純）

（月刊『望星』２００９年７月号）

う

倒壊する巨塔　上・下

――アルカイダと「９・11」への道

ローレンス・ライト著／平賀秀明訳

白水社

　毎年この時期になると、九・一一の日にパキスタンの山奥で古ぼけたテレビを見つめながら感じた、あのやるせない思いがよみがえってくる。罪のない市民に、どうしてこんなにむごい仕打ちを下せたのか。そこまでの激しい憎しみはどのようにしてはぐくまれたのか。そして、あんな大それた計画をどうやって実行できたのか……。情報から隔絶された現地にいたあいだはもちろん、帰国後にいくらニュースを集めても、疑問は解けなかった。それが、本書を読んでようやく、すとんと胸に落ちた気がする。

　本書は、九・一一に至るアルカイダの軌跡と、それを追うＦＢＩ（米連邦捜査局）の活動を掘り起こした、大部のドキュメントである。著者は作家・脚本家で、雑誌『ニューヨーカー』のスタッフライター。二〇〇六年に刊行後、ピューリッツァー賞を受賞するなど大きな評判を呼び、邦訳の刊行が待たれていた。

　一九九六年、ドイツの米軍基地に拘束されたスーダン人が捜査官に初めてアルカイダなる謎の組織の存在を告白するところから本書は幕を開ける。まるでミステリー小説のような展開だが、すぐさま時代はさかのぼって、一九四八年にエジプトを逃れてきたサイイド・クトゥブが、自由と繁栄を謳歌するアメリカ社会で何を考えて過ごしたのかが描かれる。二年後に帰国したクトゥブは、後世のテロリストたちが常に規範とする独自の反近代過激思想を打ち立て、処刑される。

　続いて語られるのが、ビンラディンとザワヒリの生い立ちから青年期だ。裕福で近代的な家庭で育った心優しい子どもたちが、なぜ過激なイスラーム主義に走ったのか。関係者への丹念な取材でそれぞれの人間関係や社会状況を浮き彫りにし、内面の変化に迫っていく。エジプトの革命に固執するザワヒリを配したことで、一貫して反米を掲げ続けたビンラディンの独自性が際立った。ソ連のアフガン侵攻時代に義勇兵として出会った二人は反目しつつも互いを必要とし、やがてひとつの国際テロ組織にまとまる。

　後半は型破りの捜査官、ジョン・オニールらのＦＢＩと、貴重な諜報情報を独占しようとするＣＩＡとの、息詰まる対立の物語となる。もし両者が縄張り意識を捨てて協力すれば、あの惨劇は未然に防ぐことができた。そうすれば、タリバン政権からも見放されていたアルカイダはじり貧に向かい、今世紀の世界のあり方は大きく変わったことだろう。

　各章末の詳細な注釈、五百六十名にものぼるインタビュー先リスト、各国にいる多数の協力者、膨大な参考文献。圧倒的な取材力と一気に読ませる筆力に、アメリカのジャーナリズムの真価を見た。そして、テロリストもまた人間なのだという思いが強く残った。（評・丸山　純）

ローレンス・ライト　一九四七年生まれ。作家・ニューヨーカー誌スタッフライター。日本でも公開された映画『マーシャル・ロー』の原作・脚本を手がける。

（月刊『望星』２００６年10月号）

戦場の掟

スティーヴ・ファイナル著／伏見威蕃訳

講談社

　国境を越えてイラク領内へと進む大型トラックの車列。要人を乗せてバグダッド市内を走る装甲リムジン。その護衛を務めるのは米軍ではなく、民間の警備会

社に高給で雇われた傭兵たちだ。地雷を踏まないか、敵に遭遇しないか、ぎりぎりの緊張が続く。そんな現場に同行し、イラクで大きな問題となっている民間警備会社の驚くべき実態を暴き出したのが本書である。著者はワシントンポスト紙の記者で、一連の報道によって〇八年度のピュリッツァー賞を受賞している。

世界最強の米軍が、自軍の警護をはじめさまざまな軍事行動を民間に委託しているのは「小さな戦力で安上がりな戦争を」とする戦略のせいである。米兵三万人に対して、傭兵は二万人とも七万五千人とも言われるが、傭兵は何人死んでも米軍の死者としてカウントされず、議会や世論を刺激しないですむ。日本企業が近年こぞって真似た、正社員を減らして非正規社員に置き換えたのと同じ米国流の歪んだ合理性が、ここにも見られる。

傭兵の大半が社会から落ちこぼれた元軍隊経験者で、暴力や危険を好む、いかれた荒くれ男ばかりだ。彼らにはイラクの法律も、米国法や国際法も適用されないため、面白半分に一般のイラク市民を殺害したり、武装勢力とみなしていきなり発砲する事件が相次いだ。激しい反米感情が高まっていったのも当然だろう。

著者はコーテという元大学生の快活な傭兵と親しくなるが、父の危篤で一時帰国する間に、コーテらのチームが武装勢力に拉致されてしまう。その後は、民間警備会社の非道ぶりを告発する一方で、コーテの家族と焦燥や悲嘆を共有した。

ジャーナリストと個人の領域を自在に往復して、まるで小説のように読める迫真のドキュメントを紡ぎ出す。米国ジャーナリズムの底力を、またもや見せつけられた思いがする。（評・丸山　純）

（月刊『望星』２０１０年２月号）

中東民衆革命の真実
――エジプト現地レポート

田原牧著／集英社新書

チュニジアのジャスミン革命の後、次はエジプトかと世界が注視するなか、中東問題の専門家たちはこぞって絶対にそれはないと主張していた。ところが二月十一日、エジプトを三十年支配してきたムバラク政権は、民衆の力で倒される。専門家たちの予測はなぜ外れたのか。いったいエジプトに何が起きたのか……。

震災と原発事故のせいでそのままになっていたそんな疑問をそろそろ解決したいと思っていた矢先、本書に出会った。

著者は留学生時代と特派員時代に長くカイロで暮らした経験を持つ、新聞社のデスク。急変する事態を座視できず、ムバラク辞任の前日にカイロ入りする。

タハリール広場の外はいつもの日常生活が続いているのに、広場に入るとまるで村祭りのような空間が広がっていた。食べ物を売る屋台に人々が群がり、周囲にはテント村が並ぶ。ケータイのカメラで記念写真を撮る若者。はしゃぐ子どもたち。ベールで髪を隠した普通の女性や十字架を下げたコプト教徒もいる。

その中心となっていたのが、ネット上のフェイスブックでつながる若者たちだ。町のいたるところにネットカフェがあり、小学生も学校からカフェに直行するというのには驚いた。若者たちは欧米的価値観を受け入れ、ムバラクの老害に対して容赦がない。最後の十年は失政が目立ったが、アラブ世界におけるエジプトの地位を回復し、二百億ドルもの借金を帳消しにしたりしたムバラクに花道を用意してやりたいと思う旧世代とは、大きな断絶がある。そんな「新しいエジプト人」が全国から集い、「タハリール共和国」を打ち立てたこと自体が非エジプト的で、革命的なことだった。

新世代を裏で支えたのが、ムスリム同胞団や共産党などの旧来の勢力だ。デモの最前線で体を張ったのは同胞団青年部だし、医師たちは救護所に詰め、婦人部は炊き出しやボディチェックを担当した。まさか同胞団と一緒に戦うとは夢にも思わなかったと、労組メンバーは苦笑する。こうしたさりげない会話に、エジプトでの豊かな取材経験がにじみ出る。

市井の声を拾った前半に続き、本書の後半では、なぜこの民革命が成し遂げられたのかがさまざまな角度から分析される。為政者、民衆、イスラーム主義者、左翼、軍部、アラブ諸国、そして米国といった当事者それぞれの思惑に、グローバリズム、ＩＴ、メディア、ウィキリークス、民主主義、テロリズム、貧困や失業、弾圧などの諸問題が複雑に絡む。それらを鮮やかに解き明かしてくれる自在な筆致に、ぞくぞくさせられた。

最近では、軍が民衆に銃を向ける事態も何度か発生している。今後の世界の趨勢を考えるうえでも、本書の議論をしっかり受け止めたいと思う。（評・丸山　純）

たはら・まき　一九六二年生まれ。東京新聞特報部デスク。同志社大学一神教学際研究センター共同研究員。主な著書に『ネオコンとは何か』『ほっとけよ。』

（月刊『望星』２０１１年９月号）

ブラックウォーター
――世界最強の傭兵企業

ジェレミー・スケイヒル著
益岡賢・塩山花子訳／作品社

米共和党は「小さな政府」を標榜し、市場の原理に極力任せるという政策をとる。つまり民営化の推進だが、ブッシュ政権時代にはなんと戦争までが大幅に民営化された。補給や整備などの後方支援だけでなく、要人警護から最前線での戦闘まで、これまで正規の米兵だけが担ってきた高度で戦略的な役割を民間の軍事会社が引き受けるようになったのだ。

その代表が「世界最強の傭兵企業」と異名をとるブラックウォーター社である。九七年に元特殊部隊員のエリック・プリンスによって創設された若い会社だが、九・一一後の特需で政権に深く食い込み、みるみるうちにビジネスを拡大した。本書は同社をめぐる米国の暗部を徹底的に暴き出した五百ページを超える迫真のドキュメントで、ニューヨークタイムズの年間ベストセラーにも選ばれている。

戦争民営化の扉を開けたのは、ブッシュ父の政権で国防長官だったチェイニーだという。軍事費を百億ドル削り、兵数も二百二十万から百六十万へと減らした。その穴を埋めたのが後にチェイニーが経営者となるハリバートン社で、湾岸戦争とイラク戦争で巨額の利益を得た。国を売るとは、まさにこういうことだろう。

軍事費の削減で、軍は戦闘訓練施設の不足に悩まされた。プリンスはここに目を付け、ノースカロライナ州に広大な訓練場を建設して、米軍のみならず、各国

の兵士や警察官の訓練業務を始める。さらに退役した特殊部隊員を破格の高給で雇い、アフガンやイラクに派遣する傭兵ビジネスを展開した。当初はいかなる犯罪行為があっても民間派遣要員は罪に問われなかったため、テロリストと勘違いしたイラクの市民多数を無差別発砲で殺戮する不祥事も起こり、米国への憎悪をかきたてた。当時の政権中枢が超保守的なキリスト教右派で占められ、プリンスもまたイスラーム教徒を殲滅する十字軍と自らを位置づけていたのも、傭兵たちが傍若無人に振る舞った遠因だろう。

〇五年にハリケーン・カトリーナが米国南東部を襲った際、ブラックウォーターはいち早く現地入りし、重武装でパトロールにあたるなどして災害時の治安維持能力を国内で誇示した。またCIAの元高官を社内に迎え入れ、その広範な人脈を活かして諜報情報を国内の主要企業に提供するサービスも始めている。たび重なる不祥事でアカデミ社と改名したが、傘下のチームは日本の青森にある米軍施設やウクライナ東部、シリア・トルコ国境などで警備にあたったり、軍事訓練を施したりする姿が目撃されている。

もはや米国は民間軍事会社抜きでは戦争が遂行できない。軍産複合体と政官が癒着し、国民の目も届かない。世界の安全保障をこんな国が握っているのかと思うと、空恐ろしくなる。（評・丸山 純）

じぇれみー・すけいひる　一九七四年生まれ。調査報道ジャーナリスト。ニュース番組などで米国の暗部を告発。邦訳に『アメリカの卑劣な戦争』がある。

（月刊『望星』２０１５年２月号）

イスラム国とは何か

常岡浩介・高世仁著／旬報社

今年になってパリの新聞社襲撃と「イスラム国」による日本人人質殺害事件が相次ぎ、パキスタンにムスリムの友人・知人たちがいる私は毎日いたたまれない気持ちで過ごしてきた。中東情勢はどうなるのか。イスラームと今後どう付き合っていけばいいのか。多くの本を手にしてみたが、なかでももっとも印象深いのが、昨秋、学生の渡航に関与したとして私戦予備陰謀罪の被疑者扱いされた常岡浩介が語る『イスラム国とは何か』だ。

この本の魅力はもちろん、閉ざされた「イスラム国」の支配地域に三度も入り込んで実際に現場を見てきた点にある。なまなましい国境越えの模様から占領下で営まれる市民生活、外国人義勇兵それぞれの思い、裁判に通訳が必要なので連絡してくれと電話をかけてくる司令官など、その体験談は圧倒的なリアリティと説得力をもって迫ってくる。蛮行を繰り返す狂信的な集団だと決めつけずに、彼らもまた生身の人間であることを市民の立場から見つめる。これこそジャーナリストが現場に足を運ぶ意味であり、日本語で現地の実情を知って自分で判断できることのありがたさだとつくづく思う。

本書は書き下ろし作品ではなく、映像ジャーナリストの高世仁がインタビューをしてまとめたものだが、高世の話の進め方がじつに巧みで感心させられた。ムスリムである常岡に素朴な疑問を次々とぶつけてイスラームの基礎知識やムスリムの心情を説明させたり、欧米メディアの常識的な解釈をわざと並べて、「イスラム国」は軍隊としては弱いのに反政府勢力から漁夫の利で領土をかすめとって広げているだけといった、常岡独自の分析を多く引き出すことに成功している。

終盤で「現状を招いた責任はどこにあるのか」と問う高世に、ひとしきり九・一一以降の米国の失敗を挙げてきた常岡は「残念ですが、もう遅い。この流れをすぐに変えるのは無理でしょう」と漏らす。ジハード主義は武力で撲滅できるものではなく、叩こうとすればするほど米国への憎悪がつのってテロが拡散する。アラブの春が「イスラム国」の台頭へとつながり、米国をさらなる泥沼の消耗戦へと引き込むとはなんという皮肉だろう。

今後しばらく世界が迎える暗い時代に向けて、ひとつの希望が「中東で特別に好かれている日本」だと常岡は言う。二〇一二年、同志社大学の招きでタリバンとカルザイ政権の大臣が同席して対話の機会を持った。平和主義を貫き、どちらの敵にもならずに信頼を得てきた日本ならではの国際貢献への道がここにある。

なお、本書の理解を深めるために、内藤正典の『イスラム戦争』を挙げておきたい。移民問題やこの同志社大学の試みなどを通して、イスラームへの理解と対話の可能性を探る。（評・丸山 純）

つねおか・こうすけ　一九六九年長崎県生まれ。フリージャーナリスト。アフガニスタン、チェチェン、イラクなどを取材。著書に『ロシア 語られない戦争』

（月刊『望星』２０１５年４月号）